

て長安の都御城御立出てにありまして其道々に於ては十分の
 警備を致してございませ、唯今東華門を出で、四辻の此方へ來
 らんとする、帝に於ては勿論馬車へ御乗もにありまして四邊へ
 御心を付いて御在になりませと、汚い扮装をして居りませ、旅費
 が道の傍らに停んで居りませ、道を通つて参りまして今風塵
 間近にありませと、旅費包みの中から錦襦の袷、九環の錦杖、此
 二品を取出しまして、僧吾れ旅費に尽きて天下に稀ある此二
 品を賣らんと欲せ、好き人あつて之を求め賜はらば辱じけなし
 ガチャ／＼ガチャ／＼、錫杖を振つて居る帝風塵の中より御覽
 にあると、中々其錦襦の袷と云ふものは容易からんもの、又九
 環の錦杖と云ふものは別段あるものでございませ、早くもソレに
 感付かせられ、皇帝コレ彼所に彼の二品を商賣ふ旅費あり
 早々に求め遣はせやう致せ、委細見こまつて從者其所へ罷り越

して從者コレ旅費々々、價へエ從者ソレは賣物が、價賣
 物だから賣つて居る、從者口の減らない奴だ、何の位で商賣う
 のだ、價ナニ……、從者價は何の位だと申すのだ、價此品か
 是は價五万兩、從者五万兩……、是は何うも怪しからん奴だ、帝
 の御目に留まつたからと云ふて一週に五万兩、是は吹いたな多
 猥氣たことを言ふては往かんぞ、即ち帝の御目に留まつて御尋
 ねに相成るのだ、相當の直段を申せ、價相當の直段なら十萬兩
 だ、な、從者アレ段々殖え、る奴があるか、幾らで賣るのだ、價エ
 、左様だ、お十五万兩で賣る、從者、是は駄つて居やう、つて
 と、宜い、段々殖え、るは……、價御身方は此所へ來て唯其價
 と聞くの役を帝より申付けられて來ながら敢て直段を負ける
 の云々言ふのは野俗の心に叶は、せ十五万兩で宜しければ早々
 買上げ下し、盥かれない、買はんと言へばソレまでのこと併し天

西遊記 遊記

地廣しと雖も二つ無き品であることゆゑ、其義を申せ。立歸つて御側の者より致して右の次第を申上げると帝は十方内だつて百万両だつて其様なことは擲うのではない、苦しうない買上げるとあつた、買上げるとあつたのは言ふまでもございませぬ之を即ち今日の壇主立契に遣はさうと云ふ思召しでございませぬからソレ故に御買上げにあると極つた、早々其所へ罷り越して從者、帝御買上げになるから左様相心得る一僧さうか付いては自から御手に觸れんければならん、必ら非不淨の其方等の手に渡すことは相成らん、從者「不淨の……融いことを言ふ此坊主は……右の次第を奏聞致しませると、苦しうない、此所へとあつたることございませぬから、茲で彼の不潔い粉裝を致して居りまする旅僧自から御車の御側へ罷り越しませした、是れ尋常の御車に上せ、陀落山の觀世音菩薩の化身

でございまして計らざるも釋迦牟尼如來より致して御預かり申上げたる錦襦袢の袈裟九環と錫杖が之を皇帝の御手に觸れて茲に觀世音菩薩帝に一言を呈しませます一條より追々三藏法師南天竺へ三藏の眞經を求めに参りまする件次卷より益々佳境に入りませす。

西遊記 卷之一終

明治卅一年三月廿一日印刷
 同 年三月十四日發行

西遊記

淺草公園第六區三號百四
 桃川燕林事
 講演者 蘆野萬吉
 發行者 東京市神田區佐久間町三丁目卅八番地 市川路周
 印刷者 同 淺草區森田町五番地 小宮定吉

發行所 東京市神田區佐久間町三丁目三十八番地 文事堂

文學堂小説叢書目録

桃川燕林講演 今村次郎速記 赤穂四十七士傳 全十冊 一冊二付 二十錢 全部一割引	桃川燕林講演 今村次郎速記 德川十五代記 全七冊 一冊二付 二十錢 全部一割引	桃川燕林講演 今村次郎速記 太閤記 全二十冊 一冊二付 二十錢 全部一割引	桃川燕林講演 今村次郎速記 俗三國志 第一卷來々十 二月發行仕候
桃川燕林講演 大久保彦左衛門全三冊 一冊二付二十二錢	桃川燕林講演 佐倉宗五郎全二冊 一冊二付二十二錢	桃川燕林講演 梅川忠兵衛全一冊 二十錢	桃川燕林講演 實話 明治天一坊全一冊 二十錢
伊東國潮講演 鬼坊主清吉全一冊 二十錢	桃川燕林講演 敵鶴權兵衛全一冊 廿五錢	錦城齋貞玉講演 荒川武勇傳全一冊 廿五錢	田邊南嶽講演 高橋松傳合本一冊 廿二錢
錦城齋貞玉講演 梅野由兵衛全一冊 二十錢	眞龍齋貞水講演 客會津の小鐵全一冊 十八錢	錦城齋貞玉講演 敵俊徳丸全一冊 十八錢	桃川燕林講演 松前屋五郎兵衛全一冊 廿二錢

